
どうしようもないくらいに、好き

maki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうしようもないくらいに、好き

【Nコード】

N1915M

【作者名】

maki

【あらすじ】

こつこつ経験は誰にでもありますよね……………あるよね？……………あるんだよ！

（前書き）

貴方の側でだけ、

咲きたいんです．．．．．

誰かが言っただけだ、恋は突然降りてくる物だ。

*

歌手はうらやましい。嘘であつてもあれ程に愛を語れるなんて、なんて言うのだろう、うん、歌手になりたい。

私の名前は羽須美だ。容姿はきっと上の中には入る自信がある。私の思い過ごしだったなら最悪だが、鏡と他の人を見合わせても見劣りしてない、と思う。

まあ、なんでこんな支離滅裂な話をしているのかというと、私には好きな奴がいるのだ。

中学生になりたてだった4年前、なんていうのか、案の定、というかベタ過ぎて話すのも恥ずかしいのだが、初めて見るたくさんの知らない人達を目前にした私は

「何だよ、こんなにたくさんの人間と人間関係を構築しないといけないのかよ、あーうっとおしいしめんどくさい」

そんな風に腐ってた、というよりいきがってた。

よくいるでしょ、嘗められたら終わりだとかいっている男子が、いない？そうかい、そうかい。

そんな空気を撒き散らしていたものだから誰も話しかけて来なくてフフン、チキン共め、とか考えていたらクラスは係り決めをしていた。

正直、この時は余り梓にでも入って1年を何とかやり過ごそうとか思っていたのだ。

太一が話しかけてくれなかったらきつと人付き合いの仕方を忘れたまま、残りの人生を過ごすことになっただろう。

それくらいに太一には感謝してる。その時点で私は太一の事を好きになっていたのかもしれない。

太一「お姉さん、体育会系の行事とか興味あったりする？」

第一印象は最悪だったであろう私に躊躇無く話しかけてきた太一に對して私は何ということか、睨み付けたのだ。

何様だよと思う。できる事なら入学式からやり直したい。

太一はみんなの中心にいた。何だか人を率いるような感じではないと思うのだが、人懐っこい性格は人を引き付けた。

太一が私と話していると、自然に私は他の子とも言葉を交わしていつて、クラスに馴染めた。

クラスの子達としゃべっているとやっぱり私も同年代の女の子なんだなって思った。

話してみると佐波菜は「羽須美は美人のクセに仏頂面してたからみんな怖がってたんだよ」って言っていた。この時に少しだけ自分に自信がついたんだ。

太一は野球少年だった。ピッチャーらしい。チームは強いけど太一は補欠らしい。でも太一のチームメイトからの評価は異常に高かったのが不思議だ。何だか素人がわからない理由があるらしい。

高校受験の時期、私は気付いたら太一の進学する高校を調べていた。もうこの時期にはさすがに自分の気持ちに気付いていた。堂々と好きだと言えた。

高校に入ると太一は1年生なのにエースとして活躍していた。クラスも違ったし、練習時間も長くなったから話す時間は少なくなっていたけど、すれ違ったりするたびに私の心は踊りっぱなしだった。

羽須美「もうダメ、好き過ぎる！」

しょっちゅうこんな事ばかり聞かせていた佐波菜と笑子は、いつもうんざりしながら聞いていた。

そんなに好きだったら告っちゃったらいいじゃんって思うかもしれない。

でもダメだ。どんな恋にも少なからず壁が存在する。私の場合は絶対壁だった。

太一には祐希とかいう名前の幼馴染みがいた。小学生の時からずっとバツテリーを組んでいるらしい二人は、今だにキャッチボールをしている。

前に、一緒に帰って距離を縮めよう大作戦、で、遅くまで校舎に残って太一と一緒に帰ろう、そう思って8時過ぎ頃、太一は祐希とキャッチボールをしていた。祐希は座ってボールを受けていて、太一は立ってボールを投げ込んでいた。

とっても、大事そうに投げ込んでいた。

あーあ、無理だ。明らかに太一は祐希が好きなんだ。そういう感情は太一にしか感じた事はないけれども、祐希に対する太一はまるで紳士のようなだった。

そんな感じで私の4年の恋は、意外な伏兵の出現によって終わろうとしていた。

*

太一「久羽？何してんの？」

太一だ。ヤバイ、好きだって言っちゃいそうだ。

ていうか名字で呼ばないで欲しいな、下の名前で
もっとな馴れ馴れしく接してよ、太一。

羽須美「ん？別に何もしてないよ？」

いつもみたいに言葉を交わす。それでも相当に押さえている。正直
言って今すぐ抱きつきたくてしょうがない。

羽須美「ねえ、太一」

喉の奥からどこことなく猫なで声の様な声が勝手に出てきて自分でも
びっくりする。

ああ、ダメだって、そういう事は聞いちゃダメなのに。

羽須美「祐希さんの事、好き？」

太一「んー……好きだけどさ、そんな事聞いちゃう羽須美
は俺の事好きだったりする？」

……太一ってさあ、こつとこつと私のツボを突くよねえ。

羽須美「うん、大好きです」

あー、ちよつとの傷跡くらいは残せたかな？

啞然としている太一の胸の中に思いきって飛び込んだ。

ずっと憧れていたその場所は思ったよりかは小さかったけど、居心地は最高だった。

時間はかかるかも知れないけど、多少は貪欲になってしまおう。

自分から進んでいく事を教えてくれた太一に、私は進み始めた。

羽須美「……………ニッ」

(後書き)

続きをぜひ書きたいです

コメント次第！かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1915m/>

どうしようもないくらいに、好き

2010年10月8日23時18分発行